

フィリピン南部：サンボアンガ、バシランでの戦闘 モロ民族解放戦線(MNLF)ミスアリ派と政府軍の衝突をめぐって 石井正子（大阪大学大学院人間科学研究科） 2013年9月22日



2013年9月9日、フィリピン南部ミンダナオ島の最西端にある商業都市サンボアンガ(Zamboanga)で発生したモロ民族解放戦線(Moro National Liberation Front: MNLF)と政府軍との戦闘は10日経った今日も継続しており、国内避難民の数は11万人近くにのぼっている。死者数は100人を超えているが、そのほとんどがMNLFの兵士だと報じられている。この間、戦闘は南のバシラン島にも拡大した。

では、なぜ今回の事態に立ちいったのか。これについてはいくつかの見方があるが、まずそれらを整理してみたい。

1) 比政府とモロイスラム解放戦線(Moro Islamic Liberation Front: MILF)との和平交渉の妨害：

今回の武力衝突は、フィリピン政府軍とMNLFミスアリ派との間で起きている。そもそもモロ民族解放戦線(MNLF)は1970年前後にヌル・ミスアリ(Nur Misuari)をリーダーとして発足した。しかし、2001年4月、MNLF中央委員会のメンバー40人が集まり、1996年のMNLFとフィリピン政府との最終和平合意後、実績を上げていないミスアリへの不信任を表明した。そして、MNLF幹部15名が中心となり「15エグゼクティブ・カウンシル(Executive Council of 15: EC15)」と呼ばれる派を結成し、ミスアリとは決別している。

こうした背景のなか、何度となくつまずきながらもMNLFとは別路線の和平交渉を継続してきたフィリピン政府とMILFからみれば、今回の戦闘は両者の和平交渉に対するミスアリ派による「妨害」と映る。両者は9月10日から13日までマレーシアで第40回予備的和平交渉を実施し、最終和平合意を構成する最後の付属文書をまとめる予定であった。しかし、戦闘はその前日にお

こっている。両者は和平交渉の初日に共同声明を発し、MNLFが今回の暴力事件をおこしたと、はげしく非難した。

2) 優先開発支援資金(Priority Development Assistance Fund)、通称「ボーク・バレル」の不正流用事件から国民の目をそらすための政治的な戦闘：

フィリピンではこの8月末に国の監査により、複数の議員が「ボーク・バレル」から合計100億ペソ(2億2,600万ドル)を実在しないプロジェクトなどに不正に流用したことが判明し、マニラで大規模なデモがおこっていた(ロイター、「フィリピンで大規模反政府デモ、「ボークバレル」資金撤廃を求め」、2013年8月26日、<http://jp.reuters.com/article/worldNews/idJPTYE97P07J20130826>参照)。そこで、今回の戦闘の拡大は、政府が国民の関心をそらそうとする政治的な常套手段だとの見方もある。

3) 比政府とMILFとの和平交渉から疎外されたMNLFミスアリ派やスル諸島のムスリムの政治的アピール：

2013年2月、スル王国のスルタンを名のるジャマルル・キラムIIIの弟が武装した数名をふくむ100名以上と

ともに、所有権を主張してサバ州に乗り込んだ一件があった(Meg Kagawa, "The Sabah Situation," P' s Pod , March 2013参照)。その際、彼らは、フィリピン政府とMILFとの和平交渉から外されたことへの不満を述べている。同年8月12日、ミスアリは、MNLFの自らの派の集会で、ミンダナオ、パラワン、スル、サバなどをふくむ地域の独立を宣言した。こうした一連の動きはフィリピン内外で注目はされたが、彼らの主張は考慮されなかった。こうした背景から、今回の戦闘は、MNLFミスアリ派やスル諸島のムスリムがフィリピン政府とMILFの和平交渉から疎外されたことに対する政治的アピールという見方がある。

どの見方も、それぞれの当事者の立場からすれば一面の真理を突いているように見える。しかし、ここでは私なりの分析と提案をしておきたい。

情勢はいまだ流動的だが、私は、今回の衝突の発端はあくまでも偶発的なものであり、必ずしも意図的・計画的なものではなかったと分析している。実際、MNLFミスアリ派が戦闘の意図をもってサンボアンガに上陸したかという点、彼らはそれを否定している。そもそも彼らはミスアリの独立宣言をめぐってサンボアンガで開催される話し合いに参加する予定であった。また、9月16日には、イスラム協力機構(OIC)、フィリピン政府、MNLFの三者会合もインドネシアで予定されており、これは1996年の最終和平合意の履行に関するレビュー会合であった(Philippine Star, Tripartite

review of 1996 peace deal in Indonesia postponed. September 13, 2013. <http://www.philstar.com/headlines/2013/09/13/1209771/tripartite-review-1996-peace-deal-indonesia-postponed>参照)。

このような予定をかかえてサンボアンガに到着したMNLFミスアリ派が、同地でMNLFの旗を掲揚しかけたところで政府軍との衝突がおきた。詳細は時間の経緯とともに明らかになるだろうが、私は今回の戦闘は、こうした偶発的な出来事から拡大したものとみている。

では、今後の展望はいかなるものになるだろうか。多くの犠牲を強いる戦闘は一刻も早い収拾が望まれるが、私はこの事件を契機に、フィリピン政府がMILFとMNLFの間で別々に進めている和平プロセスを一つに統合している方法を模索すべきであると考え。政府とMNLFとの間の和平合意はすでに1996年9月に署名され、現在は履行確保の議論が進められている。そして現在、政府はMILFと別の内容の和平交渉を進めているわけだが、この両者に矛盾があってはならない。フィリピン南部に包括的な和平をもたらすためには、異なる文脈で進められているこれら二つの和平合意の内容を相互に見極め、折り合いをつけていかなければならないのである。

しかし、メディアは全般的にMNLFを今回の事件の首謀者とみなし、MNLFが暴力を用いて問題を訴えたとの論調にとどまっている。フィリピン政府がMILFとMNLFとの間で別トラックで進めている和平プロセスを一つにまとめるべきだとの声は、残念ながら聞こえてこない。

石井正子

2013年9月22日

